

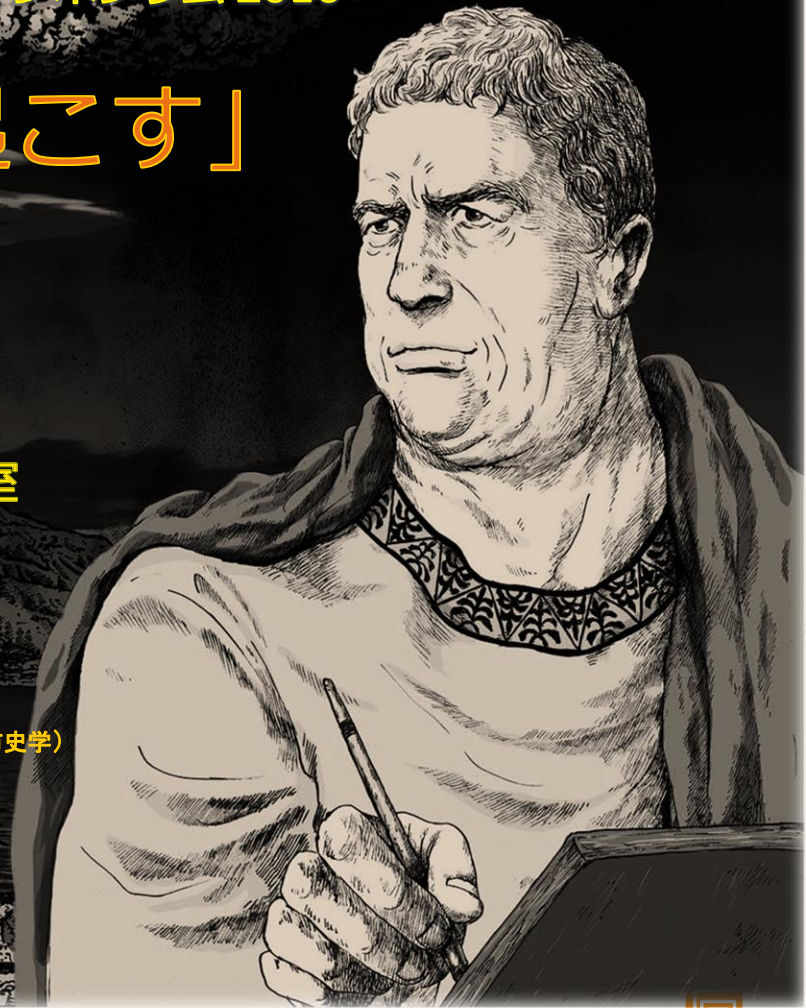
「こころを掘り起こす」

2016年
2月14日 (日)

13:00-17:30

会場：九州大学貝塚文系地区 大講義室

司会 藤田雄飛 (九州大学・教育哲学)
13:00-13:10 <趣旨説明>
13:10-13:50 橋彌和秀 (九州大学・比較発達心理学)
13:50-14:30 松本直子 (岡山大学・認知考古学)
14:50-15:30 堀 賀貴 (九州大学・古代ローマ建築・都市史学)
15:30-16:20 ヤマザキマリ & とり・みき
16:40-17:30 <総合討論>
藤田, 橋彌, 松本, 堀, とり, ヤマザキ,
& 濱本 満 (九州大学・文化人類学)



『祖父母の頃』を過ぎると、歴史が平板化する」と柳田國男は述べました。これはたしかに真実の一面を捉えていて、その世代の人々と日常的に接し、話を聞き、意見を通わせることが、その時代に関する豊かなイメージを築き上げる大きな糧となるのは間違いありません。しかし同時に、そうした対面・直接の経験を超え、「歴史の平板化」に抗いながらもわたしたちは過去から学ぶことができるし、また、そうすることの必要性は、今日さらに強まっているように思えます。

このシンポジウムでは、「ヒトのこころの歴史」への多様なアプローチについて議論したいと思います。こころを巡る様々な研究からは、文化や時代によって柔軟に変化する規範や価値観といった側面と、そう簡単には変化せず一貫した「ヒト特有の」側面との両面があきらかになってきました。こころは化石に残らない。遺跡に埋まっているわけでもありません。では、考古学や古人類学が描き出す街並みやヒトの営為の痕跡から、こころやコミュニケーションについて、どんなことを知り、考えることができるでしょう。一方で、こころの起源に関するヒトに関わる自然科学分野の研究からは、どんなことが分かってきているでしょう。都市史学・認知考古学・比較心理学と、研究を推進している研究者に話題提供をいただきます。

さらに、こうした研究から得られたものを含めた多様な情報群を統合し、当時の人々の思考やそこでのドラマを編み上げる作業と研究との接続についても考えます。古代ローマの大博物学者プリニウスを主人公にした作品「プリニウス」(新潮 45 に連載中)を合作されているヤマザキマリ氏ととり・みき氏(漫画家)をお招きし、文献や資料、現地取材等々を縦横に駆使しつつ統合して、生き活きたひとつの世界をつくり出す創作の過程や、そこで必要な資料と想像力とのバランス、あるいはそれらを超えて必要な要素についてお話しいただきます。その上で、哲学、文化人類学の研究者にも加わっていただき、現代へと連なる視座について、全体で議論します。

参加
無料

主催：九州大学大学院人間環境学府
共催：文部科学省新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」
企画：多分野連携プログラム「人間諸科学における進化心理学の位置」



シンポジウムホームページ・問い合わせ先はこちら

<http://www.hes.kyushu-u.ac.jp/~coordinator/sympo.html>